

拳母まつり

精巧に装飾された 8 台の山車が豊田の街の中心部を練り歩く「拳母まつり」は、拳母神社を中心とした 2 日間のお祭りで、古くから地元の人々の間で親しまれてきた。祭りは 10 月の第 3 週末に豊作を祈願して行われる。

山車は、高さ約 6 メートル、重さ 5 トンもある。車輪は木製で、中央部は箱状になっており、前方には小さなステージがあり、上部にも屋根付きのステージのようなものがある。装飾には、伝統的な提灯、漆塗りの梁に金の金具、縁起の良い生き物や植物を描いた金色の木彫り、日本や中国の歴史や神話の場面を描いた刺繍のタペストリーなどが使われる。1 台の山車を操るには、何十人ものスタッフが連携して作業を行い、祭りの間は、リズムカルな掛け声に合わせて山車を押ししたり引いたりする。

拳母まつりの歴史は、1600 年代前半に遡る。現在の愛知県や岐阜県の地域では、他の祭りでも山車が使われていることから、地域の流行に合わせて 1700 年代半ばに現在の山車の原型となる山車を取り入れられたと考えられる。1778 年からは、市内の 8 つの町にそれぞれ山車が置かれるようになり、地域の誇りとなっている。拳母神社から拳母城（現在の豊田市美術館）まで山車が移動し、大名をもてなすというのが伝統的な流れであった。

祭りの初日である「試楽」では、山車はそれぞれの町内をまわる。夕方になると、参加者が山車を残して矢作川で身を清め、提灯を持って拳母神社に集まり、境内を 7 周して祈願する。7 は縁起の良い数字であり、豊かさの代名詞とされている。2 日目の「本楽」では、山車が境内に繰り出されて神に披露され、神事や舞が行われる。クライマックスは午後遅く、山車に乗った乗組員たちが色とりどりの紙吹雪を観客に浴びせながら、山車を勢いよく街に送り出すことだ。夜に花火が打ち上げられて祭りは終了する。